

して、人びと馬を留めて暫く詠ながめしことなり。この辺は言語解らず、馬卒に 所の名の あるいは家の名 または行程を問うに、通ずることは稀なり。無言にて笑うのみ。まま興もありしことなり。男鹿島は世に知る所にして、八郎沼の風景はいわん方なし。この沼の怪説多し。予が信ぜざることのみ故 記さず。

八郎沼と海と一つになりしものと見えながら、汐入りの所わずかなり。この沼に海魚入らず、鮒多く、大なるは二尺余、価至って下直にて、大なるは七、八十文、白魚多し。一ノ井・セセンハゼ・海老も多く、価 白魚に同じ。この沼南北三十六町道七里、東西一里三里、所によりて遠近あり。

この辺は魚類をはじめとし、瓜・西瓜・なすびの価甚だ賤し。瓜の大いなるは三銭なり。何とてかくのごとき下直(安値)なるや、「これにては瓜を作りて業になるまじきこと」と人足の者に訊ねしに、「この地は米の下直なる所ゆえ、作りてとるも業になる」といえり。この節 米近年の高直(高値)とて、一升につき二十七銭なり。これをもって考え見れば、諸物の下直なるももっとものことなり。銀を知らず、もとより二朱銀は知らず。御巡見使御用ゆえに、この方より出せる二朱銀を、是非なく取ると見えたり。

(1988年 むめひろし著 地名

譚)

## 6. ひといち

(一日市村は)もと小村なりしを寛文2年寅(1662)蒲沼村、寛文4年辰(1664)押切村の両村を廃して一日市に引き移り合併してようやく大村となり。今の村中 北部は蒲沼より、南部は押切より引移りたるなり。

(大正2年6月編纂 一日市村郷土誌)

## 7. ひといち

戦国には政治や権力の移動によって市場も移動した。生活文化の向上によって市場が栄えた。天正時代(1573-1592)湖東部の豪族がなくなり市場も途絶えた。三浦氏が押切に居城するようになって

市神を移したが、三浦氏の滅亡によって廃された。一日市の地名は真澄記に1日「市」が立ったとあるが、湖岸にある一日市は道路その他から市場が必要な所であるから、一の付く日に市場が立ったのであろうと見るのが正しいようだ。

(1977年 八郎潟町史)

## 8. ひといち

一日市は古くから羽州街道にあり、「一市」と書かれることがしばしばであった。寛文4年(1664)、藩で制作された出羽秋田領六郡(檜山、秋田、豊嶋、山本、平荊、雄勝の六郡)絵図にも「一市」と記されておる。

(八郎潟町広報433)

畠山四郎 地名と歴史 1 ふるさと散歩 105

## 9. ひといち

街道はそれから現在の一日市町の中央通りに入り、右に折れて上町・中町・下町を真北に直進した。拡幅・整備されているが道筋は藩政時代そのまま、夜叉袋を縦断し、真坂村に至るまでよく確認することができる。中央通りの宮野ふとん店・斉藤自転車店の所に本陣があった。絵巻にも街道に面して東側中央部に「御本陣」の記載が見え、他の民家と異なった屏を廻らした門・樹木に包まれた家居が描かれている。

『享保郡邑記』に「…・駅馬、蛇川二里一丁四十六間、鹿渡二里廿五丁五十五間」とあるように宿駅があった。『秋田風土記』には「街道駅也。大川と15日代」とある。享和2年(1802)の『測量日記』にも、「一日市村、駅次大川村と15日代り、下り月15日」と見えるから、馬・人夫の継立ては、大川村と月 15日交代であったことがわかる。

『八郎潟町史』によると、寛文2年(1662)に羽州街道の宿駅に指定され、その条件として、蒲沼村21戸・押切村19戸・一日市村13戸を合併して宿場集落とし、宿駅支配には桧山所領の多賀谷氏が当たったという。

一日市村は、天正19年(1591)『出羽国秋田郡知行目録写』に、大川村と合わせ、「参百拾壱石四